

合掌

合掌と宗教

手を合して拝むということは宗教のみが持つ特別な世界であります。そうして人間のみが持ち得る姿であります。

合掌礼拝は、宗教生活における一つの形式であります。体の上に合掌の相が現われるに先だつて、その精神生活においてすでに、合掌の心がなくてはなりません。この合掌の心こそ、宗教において欠ぐことの出来ない心境であります。合掌が心の問題だからとて、姿の上に合掌のないことは許さるべきではありません。姿として表われないような心の相を考へることが出来ないからであります。

もし合掌と不退の求道心とがなくなつた時、すでにそこには、如実の宗教生活はないと言つてもいいと思ひます。合掌は、聖なるものに仕える態度であり、真理を受領する一番正しい相であります。極言すれば、合掌のない人には、宗教はないと言つて差支えありません。合掌のない所に宗教的真理は相を表わさないのであります。

曇鸞大師は浄土論註の中に「帰命は即ちこれ礼拝なりと、然るに礼拝はただこれ恭敬にして必ずしも帰命ならず。帰命は必ずこれ礼拝なり。もしこれをもつて推せば帰命を重しとなす。」と申されましたが、「帰命を重しとなす」とは、帰命すなはち「信」が根本であることを言われたのであります。「帰命は必ずこれ礼拝であつて、礼拝必ずしも帰命ではない」とは、礼拝に対する深い批判のメスが光つております。

帰命尽十方無碍光如来でも南無阿弥陀仏でも、お名号は必ず、帰命又は南無がついています。南無帰命は、仏の救済意志であると共に、衆生の大信心であります。阿弥陀仏とは、たくする法であり力であります。随つて、阿弥陀仏をはなれて南無の機（信）はなく、南無の信をはなれては阿弥陀仏は無意味であります。南無阿弥陀仏とは、仏の全体であると共に、助かる我の全体であります。

南無は帰命であり、帰命は礼拝であります。であるから阿弥陀仏の生きます所、必ず礼拝合掌ありということが出来ます。言いかえると、合掌なき所、如来はましまさぬのであります。

自覚と合掌（一）

合掌は如来を真に信知した相であると共に、自己を知る者の相であります。酔うことによつて成り立つ宗教があります。迷うことによつて生れる迷信もあります。だが仏教は、一切の酔いからさめ、一切の迷いから出で、自己を凝視め自己を知る者の上のみ受け取ることの出来るみ教であります。

華やかな議論もいい、はつきりとした概念の骨格も必要、高い理想もいい。だが現実の我を忘れた時、一切は、浅ましい戯論であります。遊び事であります。

如来の大悲に撰取されてのみ凡夫であります。凡夫とは内観されたる我であります。地獄一定の愚禿は如来の智慧光によつてのみ誕生するのであります。我等は愚禿と聞く時、大地に合掌せる聖人を思ひます。愚禿とは如来に合掌せる者の名であります。自己を知り自己にさめたる自覚者の姿であります。

自覚と合掌 (二)

賢いと思つている者、必ずしも賢いものではありません。ギリシヤの大哲ソクラテスは、自己を愚か者と信じていたと言います。愚禿の愚はおろかな者との自覚であり、禿とは悪人の名であります。

愚↓賢↓愚、初めの愚は習うべき愚ではありません。愚を愚とも知らない子供の愚であります、学ばず、求めず、考えず、知らざる愚であります。愚を自覚する時、学ばずにはいられません。求め、考え、知り、習い、そうして賢くならねばなりません。大賢は愚に似たりと言います。賢から更に愚に至る、はじめてそこに不滅の道が生れているのではありますまいか。愚痴の法然坊にしても、愚禿親鸞にしても、汲めどもつきぬ泉でありながら、愚の自覚に生きられました。その愚は大蔵経を五度繙いた後に、叡山二十ヶ年の修道を了えた後の愚でありました。

打破八識 八識を打破して

始称丈夫 始めて丈夫と称すべし

莫認小智 小智を認むることなかれ

順至大愚 順つて大愚に至れ (滴水禪師)

聖人様たちは大愚であつたのであります。「丈夫」と称することすら出来ない大愚だつたのであります。我等は決して聖者を真似てはなりません。卑下慢はおそろべき偽善であります。けれども又虚仮賢善にとどまつてはならない。唯聞くことによつて、求めることによつて、愚を体験すべきであります。現代はあまりに賢い人の集まれる時であります。賢者の世界は狭い。

知れどもく、法は如来のものであります。一知れば十の深さを持ち、十わかれば、千万の奥行をもつてあらわれるのが法の相であります。法の深さは、人生の深さであり、如来の広大さであり、法界の神秘の不可思議であります。そこにのみ愚の自覚は生れるのであります。

合掌は愚者のとれる相であります。

懺悔と合掌

罪悪なくしては生きられぬ者の最後に到達する世界は懺悔であります。しかして合掌は懺悔の象徴であります。後悔は穴にむかつて入るような暗さと行き詰りであるに對して、懺悔は丸裸になつて救われた者の心境であります。

如何なる恐ろしい過古を持つ悪逆も、一度、その心にとりまける固い殻を打ち破られて、如来大信心、仏性の清水が噴出する時、如何なる因果の鉄鎖もこれを縛ることの出来ぬ、広大なる大海原に出されます。懺悔の天地がそれであります。懺悔は信の必然的な内容であります。そうして懺悔は唯如来によつてのみ可能であります。聖人は「如来の廻向をたのまでは、無漸無愧にてはぞせん」と讃嘆せられました。如何なることも平気で出来、何をして心も心がとがめないのは、心が腐つていたのであります。「畜生とは無漸無愧」であります。聖人の懺悔の探さは、廃悪修善の自力に絶望

し、如来の大悲によつて救われてゆかれました。しかして、聖人は懺悔の最深処をえぐつて「無慚無愧」と告白せられました。

これ如来による魂の深い内観でなくてはなりません。唯おそれても猶おそるべきは、聖人の「無慚無愧のこの身にて、まことの心はなけれども……」の告白を浅薄に自己の上にひきよせて、荒涼たる罪悪生活の言いわけにしたり、我をつのつて、強そうに生きる我慢無自覚な我と同等に見たり、考えたりすることであります。真実に如来にあう者は、そんな所には腰かけていられぬであります。如来を失える者は自己を失います。如来と自己とを失える者が、古い殻を弄んだり、型を固執したりしている処には、唯嫌な我慢が振舞われているばかりであります。時にこうした我慢な鬼が、純異な求道者に高座から得々として大法を説いていることでもあります。滑稽よりもむしろ悲惨であります。この相即ち私の相であります。慚愧、慚愧。唯、限りなく如来の前に合掌あるのみであります。大乘菩薩道の強さと、我慢の強さとはあまりにもよく似ていて、しかもこれほどの違いも亦ありません。

合掌は実にあるのままの自己を知る慚愧の象徴であります。

価値と合掌

二千円のダイヤモンドが姿をくらすと、青くなつて警察に訴えたり、神様に行方を聞いたり、係わり合いを調べたりするに違いありません。だが米粒一つが無くなつた時には問題にもしませぬ。これが凡夫であります。凡夫はものの皮相的価値、市場の相場より外に問題にしないのであります。且郡は座布団をしいても、小作や下女に³は敷かせないのが、道徳だ位に考えたり、大臣はえらいが老婆には値打なしと考えるのは、この皮相価値しか見ない凡夫の世界の生活であります。印度に四姓を造つて下層と名づけられる人種をおさえて横暴をしたり、日本にも小数同胞をつくつて賤視して来たりしたのは、皆この差別に囚われた、あやまつた観念から来たのであります。

米一粒の重さ須弥山より重し。仏は、ダイヤモンドを尊ぶと同じ心で、米一粒を尊ばれました。それはもの皆の中に絶対価値を見とどけられたからであります。釈尊にとつては、神の意志によつて生れたと解する婆羅門種の人も、奴隸階級として虐げられて来た首陀羅種の人も同価値でありました。而してそれは抗争の中に主張されたのではなくて、合掌の中に体得されたのであります。

絶対価値を見とどけて一回の食事すら頂戴する仏の心の片鱗でもが全国に徹底すれば、汽車の中のあの汚さはなくなるであります。人と人との争いも少くなることとであります。人格の冒瀆は一切にみなぎる絶対価値の見失われていることよりおこるのではありますまいか。無意味なる階級をつくつて威張る世界は、釈尊の心、仏のみ旨に逆つた生活であります。

仏こそ、親こそ、師こそ

親鸞聖人は「入出二門偈」において

「云何が礼拝する、身業に礼したまいき、

阿弥陀仏正へん知

諸の衆生を善巧方便して

安楽国に生ずる意を為さしめたもうが故に。」

と言われました。礼拝門は五念門の第一あります。衆生の上に成就さるべきこの五念門を、如来の成就したまいし行とせられました。如来こそ礼拝せられるのであります。群生をしてお浄土に願生する意をおこさしめたもう善巧方便に、如来こそ身業に礼したもうのであります。礼拝するは仏であり、高慢なのは凡夫であります。この如来の合掌の大悲こそ、そのまま我等の上に「願生安楽国」を成就するものであります。

これ 생각합니다時、合掌すべきは子よりも前に親であります。弟子よりも先きに師匠であり、教師であります。否、合掌の人こそ真実の仏であり、親であり、教師であります。全ての合掌求道の同行こそ、私の真の善知識であります。これは常に壇上に立つ私の実感であり、確信であります。

合掌の親こそ、子供の中から合掌の心を生む親であり、合掌の師こそ、善知識こそ、私の中から合掌を引き出して下さるお方であります。荒涼たる高慢がどうして真人を教育することが出来ましょう。

報謝の生活と合掌

如実の合掌は、微塵も祈願請求もとめごころを持たない心であります。如来の生命の全てを頂いて生きる心であります。春の恵みを頂いて咲いた花の如く、如来の大生命に統融されて生きる生活には、小さい我欲より割出された部分的なものを、乞い求める心を持ちませぬ。ですから断えず、お恵みの全体を頂きつつ、限りなく全体を生かしきつて生きてゆきます。かかる生活の全体が報謝の生活であります。花の咲く相の一切がそのまま報謝の全体であります。何時も自分の全体をなげ出して生きてゆきます。こうした報謝の生活は合掌によつて象徴されます。御恩に生きる心は、無味件に自分を捧げきつて生きてゆく生き方であります。全てのものに最後に与えられるたつた一つの生き方は、自己自身を献供して生きる報謝合掌の生活であります。そうしてそれは人格をして真に独立自尊のよろこびに輝かしめる生活であります。

求道と合掌

近頃の若い僧侶方は、古い僧侶の方と大分生き方が違つて来たようであります。求道の相においてのそれでありませぬ。宗派や、格式や、体面や、小さな自負心に囚われて、合掌して求めることを恥のように考えていた世界を出で、一切を超えて真に大法の前に合掌して、求めて行こうとする人々の増したことであります。それは喜ばしいことでもあります。合掌のない所に求道はありませぬ。求道のない所に合掌はありませぬ。かの華嚴経の善財童子は、合掌して五十三人の善知識に会つて道を聞きつつ遂に普賢の徳に帰して法界に入ります。南無阿弥陀仏を通して味わう時、善財童子の足跡こそ、そのまま法蔵菩薩の足跡であります。飽くことなき真理への思慕、それは合掌の旅であります。そこにのみ菩薩の願心を見ることが出来ます。

かくして合掌は救われた者の相であります。